

第1分科会（山口県）

主題：子どもに寄り添った教育指導計画に基づく保育の実践と評価

指導助言者：川崎徳子 先生（山口大学教育学部 准教授）

担当園：聖光幼稚園

司会者：細田直子（聖光幼稚園 園長）

発表者：藤田尚子（聖光幼稚園）

“：野村朝美（聖光幼稚園）

記録者：谷 淳子（聖光幼稚園）

“：末岡佳美（聖光幼稚園）



1. 発表の概要

（1）主題設定理由

日々の活動や行事が多忙で、それに追われていたため、教育課程を意識した保育ができてなかったこと、教育課程に対する教員の理解が十分ではないことが課題であった。

また、子どもの楽しそう、面白そうにしている場面の保育記録も少なく、保育記録を工夫することが必要であった。これらのことから「教育課程の再編成に向けて」という本研究のテーマを設定した。

（2）取り組みについて

教育課程を意識した保育と保育記録の学び直しをするために、山口大学教育学部准教授 川崎徳子先生をお招きし、2回園内研修を行った。

1回目では「子どもの好きな遊びの中に本当の子どもの姿が見えてくる」という話を伺い、子どもの気になるところや注意すべき点だけではなく、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面の保育記録の重要性について学び直しをした。

研修終了直後は、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面を見るのが重要だと頭ではわかってはいても、今まではその子どもの気になるところ、悪いところにどうしても目がいってしまっていたので、子どもに対する新しい見方をすることが難しい状況だった。その難しさを日々教員間で共有し合い、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面を意識して保育をしていくうちに、子どもの姿を看取ることができるようになり、保育記録としても、子どもが楽しそう、面白そうにしている場面の記録が増えていき、その記録をもとに、教員間で情報共有するようになった。その中で「年長組と年中組によるストローロケットの遊び」についての話題が出た。

2回目の研修では、子どもに対する新しい視点からの保育記録の振り返りをしたが、そこでもストローロケットの話題が出て、新しい視点から子どもを看取っている1つの実践例であることを確認した。

子ども一人一人の遊びの様子を毎日見て記録をしていくことで、その子の熱中している遊びを知ることができたり、今まで見ていなかった子どもがいたことに気付くことができた。

（3）実践例

年長組での実践例

担任が造形の研究会で作った「ストローロケット」を飛ばしてみせると、「遊びたい！」と興味

を示し、飛ばして遊んだ。
翌日も 君が遊びたいと言ってきた。

〔自らストローロケットを作る子どもたち〕

担任からストローロケットを作ることを提案



材料を準備して作り方を教える。



子どもたちが自ら作成。

君や周りの数人の男の子たちが、自分のストローロケットを作り、飛ばして遊んだ。

〔ストローロケットの改良〕

K君「羽をつけてもいい？」



自ら折り紙で羽をつけた。



K君を見て、他の子どももストローロケットの改良を始めた。

〔ストローロケットの飛行距離の測定〕

Y君「ブロックでどこまで飛んだか測ろう！」



他の子どもたちもY君と一緒にする。

ストローロケットが落ちたところまでのブロックの数を数えて、飛行距離を測定。

〔よく飛ぶストローロケットの観察〕

ちゃんのストローロケットが良く飛ぶのはどうして？



ちゃんストローロケットをみんなで見る。



担任「何が違うのかな？」



Y君「折り紙は細いほうがいいのかな？ 折り紙がきれいに折れてるね！」

一生懸命に観察していたが、どうしたらストローロケットが良く飛ぶのかという疑問は解決できなかった。

〔ストローロケットについての教員間での話題と疑問〕

保育終了後、教員間でストローロケットの話をした。

年中組でのストローロケット遊び

- ・子どもたちが「どんなストローロケットがよく飛ぶのか？」疑問を持つ。
- ・普段、自ら遊びに参加しない子どもがストローロケットで遊ぶ。



他の子どもがストローロケットで遊ぶ姿を見て興味をもつ。



自発的な「やってみよう！」という気持ちが担任には嬉しかった。

教員間での話題と疑問

- ・ ストローロケットはどうしたらよく飛ぶのか？



作り方にコツがあるのか？



飛ばし方にコツがあるのか？



翌日も子どもたちとストローロケットで遊んで研究してみよう！



子どもたち自らストローロケットの生きの吹き方にも気付いてほしい。(年長組担任の思い)

〔年長組：クラス全員でストローロケットを飛ばす〕

- ・ 担任「どうやったらよく飛ぶのか考えながら飛ばしてみよう！」



飛ばし方や息の吹き方にも目を向けてほしいという担任の思いから声掛けをする。

- ・ 特にストローロケットがよく飛んだ子どもに、担任「どうやって吹いたの？」



「力を入れて吹いた」「おなかをへこませて吹いた」「ほっぺをふくらませて吹いた」
それらの声をきいて、みんなでもう一度チャレンジした。

〔年長組：一生懸命なR君〕

- ・ R君は日頃集中して物事に取り組むことは少なめだが、友だちの声に耳を傾け、お腹をへこませ、がんばって集中して吹いている。

〔年長組まとめ〕

ストローロケットを飛ばすことを楽しんでほしいと思っていたので、K君の「羽をつけたい」という自由な発想を面白いと思い、感心した。また、K君の一言で、他の子どもたちも「自分だけのかっこいいストローロケットを作りたい！」という思いが芽生え、作りことも楽しむことができたと思う。そして、Y君の発案によって、ブロックの数で飛行距離を計ることで「遠くに飛ばしたい！」という思いに変化し、子どもたちがそれぞれにストローロケットを考えながら作っている姿が認められた。さらに、ちゃんのストローロケットをみんなで観察することで「どうやったらストローロケットがよく飛ぶのか」という疑問を持ち、友だちのストローロケットの良い面を見つけることもできた。そして、普段はあまり集中して取り組むことが少ないR君も一生懸命集中してストローロケットで遊び、友だちの意見を参考にして飛ばすことができた。

作ることに夢中になる子、飛ばし方にこだわる子、みんなが飛ばしているのを見て楽しんでい
る子など、遊びを楽しむ視点はそれぞれだが、子ども一人一人の学びの姿を感じた。具体的には、
子どもの創造性や独創性、自ら遊びを展開していく力や観察力、集中力、他の友だちの良い面を
見つけ、それを参考にする力が挙げられる。

子どもたち一人一人を見ながら、子どもがより満足感を得られるような保育や援助を考えられ
るように、これからも頑張っていきたいと思う。

年少組での実践例

〔ストローロケット遊びの導入〕

- ・造形研修会に行った際にストローロケットを作成。
- ・子どもたちに説明せずにストローロケットを飛ばす。



「飛行機みたい！」と子どもたちの声

- ・教員間での話の中でストローロケットについて年長、年中組の遊びの様子を聞く。



年少組では、どのような子どもの姿がみられるか？

担任の疑問



ストローロケットの材料を準備、設置

(曲がるストロー、担任が折り紙で折ったロケット、半分に切った折り紙、名前シール)

教室の担任の目が届きやすい場所に設置

〔ストローロケットへの反応〕

- ・ストローロケットの材料に対して
今までなかったものがあるので、子どもたちは興味津々で材料を見たり触ったりしていた。
- ・ストローロケットをうまく飛ばせない子どもが多い。



その分、少しでも飛ぶと「飛んだ！」と大喜び。

- ・担任が床に置いたカゴにストローロケットを入れようとやってみる。



子どもたちも真似をする。



晴天だったため、ストローロケットをやめて園庭に出ていく子どもが多かった。

〔子どもそれぞれのストローロケット〕

- ・ロケットを作ることが楽しい Y ちゃんは、最初ロケットを飛ばして遊んでいた。



ロケットの材料に興味をもつようになり、いくつか作る。

- ・ロケットを飛ばすことが楽しい ちゃんは、最初飛ばすことに苦労していた。



Y ちゃんを見てロケットを作るが「ロケットを飛ばしたい！」という気持ちの方が強い様子。



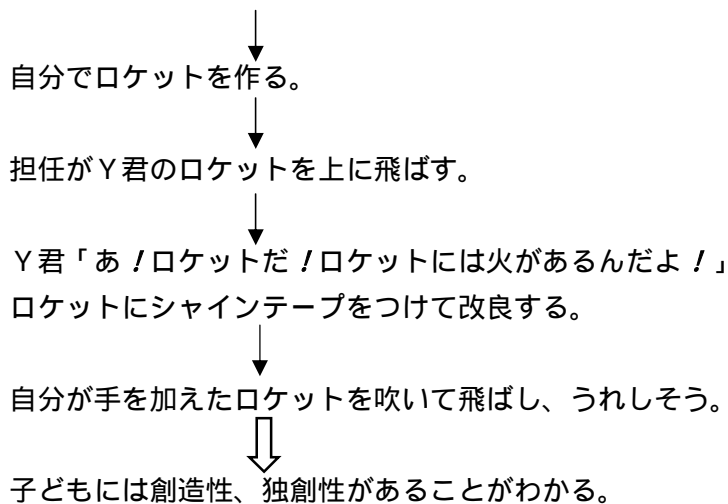
担任がストローのさし方を援助し、初めて上手に飛ばすことができた。



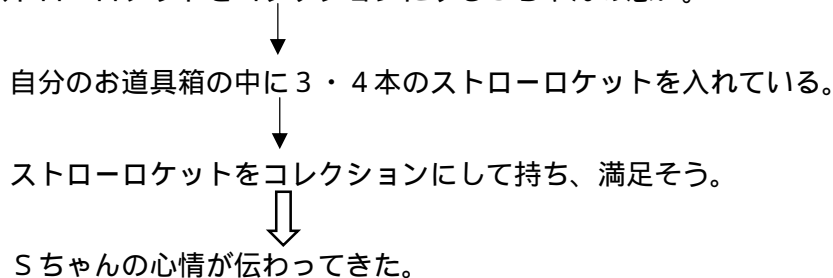
飛ばし方のコツをつかみ、上手にロケットを飛ばせるようになった。

〔ストローロケットの改良〕

- ・ Y 君はロケットに改良を加えて、うれしそうに飛ばす。



- ・ ストローロケットをコレクションにするSちゃんの思い。



〔年少組まとめ〕

ストローは飲み物を飲むために使用するので「吸う」ことは3歳児でも上手にできるが「吹く」ことは難しいため、ストローロケットの遊びは長く続かなかった。また、ストローの向きや飛ばす時にどこを持つかなどはまだ考えられないようで、ストローを持たずに吹いたり、ロケットの部分を持って吹いたりする姿が多く見られた。これらのことから、年少の子どもたちのにとっては、息を吹いてロケットを飛ばすことは難しいと言える。しかし、周りの友だちの様子を見て、自分からストローロケットの材料に触れ、遊んでみようという興味を持つ姿は認められた。少しでも飛ばすと大喜びだった。何度も吹いて飛ばし、少しずつ上手になっていく姿が見られた。今後、ストローロケットを少しでも吹いて飛ばせる喜びを感じられるように援助していきたい。また、ストローロケットでの他の遊び方も子どもたちと一緒に考え、発展できるように取り組みたい。

年少組では、子ども自ら「作りたい」ということはなかったが、担任が声をかけるとロケットを作りことに一生懸命になる子どももいた。また、手先が思うように動かないので、近くで教員が見守りながら子どもに合った援助が重要だと思った。苦戦しながらも一人でやろうとする姿も見られた。

また、それぞれのストローに名前シールを貼ってもらうと、とてもうれしそうだった。みんなのものではなく「自分の」ストローをもてることにうれしさを感じているようだった。遊ぶだけでなく、自分のものを持つという認識を持てたところもストローロケットの魅力の一つではないかと考えた。

(4) 反省と考察

教員研修をすることで、教育課程やどのような保育を見ればよいのかについて、教員の理解が

深まった。そして、教員が子どもの楽しそう、面白そうにしている場面を意識して看取ることができてきたと思う。さらに、保育記録として、子どもが好きなことをしている場面やエピソードがひろえるようになってきた。そして、ただ日々の活動や園の行事をこなしていた状況から、子どもの育ちを理解し、どのような保育計画が必要なのかが見えてきた。

これらのことから、本園では、教育課程を意識した保育計画の再編成ができるようになってきていると考えられる。

(5) 今後の課題

現在もこれからも、保育における課題はあるかと思うが、今回のような教員研修や教員間での情報共有を通じて日々の保育を振り返り、必要があれば修正しながら保育をしていきたいと思う。

2. 研究討議 グループ討議

〔テーマ〕各園の保育の実践・計画との関係、現状と課題について

第1グループ(7園)

異年齢との関わりの組み立て方

- ・小規模な園 3グループに分けて定期的に活動したり、大きな行事は縦割りの活動も取り入れている。しかし、自然なかかわりは身につけているが、社会性が身につけているかは疑問である。



- ・大規模な園 全体で集まってみるだけである。簡単な製作をしたり、外遊びをしたりするが、思っているような深いかわりに結びついていない。

第2グループ(5園)

日々の計画の中で情報共有が少ない。

終礼などでは、出来事や子どもの様子を伝えるだけで、深い話までには至らない。→終礼の工夫の必要性を感じている。

第3グループ(3園)

指導計画は年度初めに話し合っている。

園独自の教育課程にそって保育をしている。

実際、実践してやっていく中で子どもの様子を見て、環境に合わせながら、いかに楽しめるか、教師間で情報共有をしている。

保護者と園が子どもへ求めている思いに差がある。

第4グループ(7園)

選択性、一斉、異年齢、自主的など多様な保育の仕方がある。

園のやり方により、良い面、悪い面があるが、共通していることは、月案・週案・日案があり、達成するねらいもある。

一人ずつの記録を残すうえで、どこをどのように記録したらいいのか。

第5グループ(8園)

自然を取り入れている園が多く、大切さも感じている。

行事が多く、教育課程や指導計画の見直しが難しいが「いきいきした子どもを育てる」ためにも、見直しの必要がある。

第6グループ（4園）

異年齢交流をすることで、子ども同士、思いやりができる。

縦割り保育でグループを作り、行事に向けて話し合いをしている。

他学年の教師、預かり保育の教師との情報共有する機会が少ない。情報共有する場を作ることが大切。

第7グループ（5園）

子どもがどきどき、わくわくする活動は日常の生活の中であると考え、小さな出来事や良いことを見ていき、記録にするようになった。見ることで教師間の連携も積極的に取るようにした。

子どもへの見方を少しずつでも変えることが大切である。

第8グループ（7園）

記録について

- ・人数が多いため全体はあるが個人用はない。
- ・エピソードを話し合い、意見交換をしたり、教師が話し合っ情報交換をしたりして、共通理解をしている。
- ・一人ひとりの遊びを記録することで、遊びの発展がよくわかる。
- ・補助簿として残している。

情報交換は、週1回のミーティングや雑談の中で行っている。

第9グループ（5園）

毎日の保育や行事に追われている。

子どもたちは得意・不得意があることから、興味もてるように教師が援助をする大切さを感じている。

第10グループ（6園）

自然活動の取り組み

- ・園のまわりに自然が多く、自然体験ができるようなカリキュラムを取り入れている。

誕生会の取り組み

- ・誕生児に手作り品を渡すことで、おもいやり・自主性を育てている。

3. 指導助言

「今こそ保育の質を考える ～教育課程と保育の実践～」

思考の世界には、様々な物語がある。それは、記憶・経験・感情・思いなどであり、これが心の中、思考の世界である。

この世界を作っていくのが「教育」であるが、判断の基準になるのは見える部分が多いが、育てていかなければいけないのは見えるところだけではない。子どもが遊んでいる姿は見える部分しか分からない。しかし、それぞれが考えているテーマは違う。でも、一緒に活動している。ただ、やっていることを見るだけではなくて、子どもはここでどういう時間を過ごしているかということが重要である。

幼稚園は、親以外、家庭とも違う、初めての集団生活であり、保育の専門である保育者に生活がゆだねられている場所である。保育者は保育のプロとして、子どもの人間形成・精神の発達を支えていく役割・目的がある。乳幼児の教育を支え、保育を預かっている私たちが大切であるからこそ、

法で支えられ、国として資質向上につなげるために教育要領がある。これを実現していくために、園で子どもが成長するために大切にしたいこと、環境をどのようにするかを表現しているのが教育課程であり、必要なものである。



教育課程とは、入園から修了まで、どんな生活をするのか、どんな成長の過程を経て、どういう子どもに育ててほしいのかという全体像を示したものである。何をしているか、何ができるかではなく、子どもの育ちの課題を大事にして保育する園であるということ表現することを大切にしている。幼稚園教育要領に定められている願いや内容を、園でどんな過程で実現していくのか、何の活動ではなく、どういう育ち方だということを見通してやっていくことを表現する。表現するということは、保育施設とし

ての責任の果たし方を公表するということである。

具体的には、幼稚園教育の基本は、幼稚園教育要領に示してあるが、環境を通して行うものであり、幼児と共によりよい発達に必要な教育環境と創造することが大切である。教育環境を創造するということは、子どもと共に教育課程を作るように努めるもので、習得させるべき態度、知識、技能などを書く時期に決めて並べ、子どもを添わせるものではなく、環境を創造して生活が実現できるように支えていくことが教師の役割であり、幼稚園教育の基本である。

この度の園内研修では、子どもの何を見るか？ まず、自分の保育実践を見つめることを考えた。子どもが遊びに対して楽しそうに熱中し、どこでどんなことをしているかという全体的な印象や設定した活動や遊びが期待された成果になっているかという行動や行為は目につきやすく教師が気になることである。日々の記録も気になることや注意すべきことばかりを書いていたが、保育の専門家であるならば、子どもが遊びを通して具体的に何ができているか、見えているかだけではなく、途中の体験していることを捉えることが大切である。これを教師が鍛えていかなければ、見ようとしないうし、見えない。子どもの行為や活動の姿のどこにおもしろさを感じているかを見ると、気になるころではなく子どもの見方が変わってくるし、連続的に見続けていると毎日淡々とやっていることにも興味をもっていることに気付かされる。おもしろいことや心に残った子どもの姿、動きを記録することで、それを見ようとする教師の態度が変わり、子どもをよく見れるようになったし、もっと知ろうとするようにもなった。活動を続けようとする思考から遊びを見ようという視点が変わり、教師の意識がさらに専門的になった。よって、楽しいエピソードとして残り、具体的な子どもの姿が語られるようになったし、保育の場面に生かしていけるように繋がっていている。

保育の計画とは何か？ 活動や行動を並べただけでは保育の計画ではない。毎年決まった時期に同じ活動の流れを追っておけばいいものでもない。子どもが何に関心を抱いているのか、何に意欲的に取り組んでいるのか、何につまずいているのかなど、環境とのかかわりの中でどのような体験をしているのかという子どもの姿を捉えて、計画に生かしていくものである。子どもは興味・関心をもったものは自分で関わろうとする。そして、試行錯誤する中で、環境との相互作用によって発達に必要な経験を子どもが自ら積み重ねていくものであるからこそ、環境構成が必要となる。

それは、教師が場を設定し、その中で初めて子どもが環境に導かれ、応答があり、様々な体験が自分の能動性の中に出てくるという生活がつくられていくものである。

子どもは毎年一人ひとり違う。そのため、教育課程、指導計画を見直すことはとても大切である。子どもは意図的・計画的に設定した活動でないところで遊んでいるかもしれないとしたら、好きな

遊びをしっかりと見ていくこと、そして、その意味を看取っていき、遊びが活発化するためには環境（物・空間・配置・出来事・行事）を見直さなければいけない。並べた活動をこなすのではなく、子どもの姿を捉え、子どもの育ちを見通して、ふさわしい生活、保育を振り返り、環境を考えることが大切である。

その視点は、一人ひとりの育ちの課程が見え、園全体でどんな発達をするのか、それをどのように支えていくのかという様々なことを見直すことである。そして、何を見るかということ、心情・意欲・態度を見ることで、この時期に何が育っているか、どういう体験をしているかが重要である。計画の見直しは、子どもの姿から考えていくことが大切である。

これらのことから、幼児の発達の過程に応じて教育・保育の目標がどのように達成されていくかについて予想できる。子どもの心情・意欲・態度を見ながら、幼児の発達の時期にふさわしい生活が展開されるように、適切なねらいと内容を見直してることが計画の見直しである。子どもが没頭しているか、充実感や満足感を得ているかが大切となるので、これらを得るまでの時間が取れない場合は、計画の見直しが必要である。